

子どもと自然のかかわりの 中で思わされたこと

松波 淑子

日本の幼稚園の父といわれた倉橋惣三先生が、長年在職しておられたお茶の水女子大学附属幼稚園主事を退官されたのは、昭和二十四年十二月であった。翌春四月に、私はその附属幼稚園に就職した。

東京女子高等師範学校理科を卒業したばかりで、子どものことも、幼稚園のことも、何も知らない私に、倉橋先生の跡をついで主事（園長）になられた及川ふみ先生は、「先ずはじめは、お子さんと親しくなつて子どもを知るようになさい。幼稚園の先生として何をしたらよい

かは、お子さんと遊んでいるうちにだんだんわかってきますよ。倉橋先生の書かれたものを、まだ読んでいないならば是非お読みなさい。それから、あなたは理科を出たのですから保育内容の『自然観察』（当時は保育要領による保育内容十二項目の時期であった）を特に研究して下さい」とおっしゃり、私をベテランのM先生のクラスに配属して下さい。こうして私は、新入園四歳児山の組のおねえさん先生として、保育者の一步を踏み出したのであった。

入園して二週間たった日、山の組のみんなはM先生といっしょに本校グラウンドへ遊びに行った。本校グラウンドというのは、お茶の水女子大学構内の、幼稚園から三、四百メートルくらい離れた所にある大学のグラウンドで、当時、そのグラウンドは体育授業や行事等に殆んど使用されず、草ぼうぼうの広い原っぱであった。入園してあまり日数がたっていない時だったので、固い表情で口を閉ざしてじっと立っている子どもがまだ何人かいたが、グラウンドへ来たらしういう子どもが別人のようになつて活動し出したのには驚いた。幼稚園では声も出さなかつたA男が、「○○ちゃん」と大きな声で友だちの名を呼ぶ。いつも私の手を握つたまま離れないK子が私の手を離して向こうの方まで草をつみに行く。つんだ草を数本握つて「せんせえ、あげる」と持つてくる。みんなニコニコして精いっぱいのかっこをする。馴れない保育室から自然の中に出て、心が開放されたのは子どもたちだけでなく、私自身もであったように思う。

その日、子どもたちが帰つた後、保育室のお掃除をし

ながらM先生が言われた。「ああいう所へつれて行く」と、子どもがすっかり変わつてしまふわね。子どもはいろいろな環境で、いろいろな経験をさせることがたいせつね。自分に合つた所で自分の本領を發揮するのね。同じことばかりしては、子どもの本当の姿を知ることが出来ないのね」

後日、私は倉橋先生の『幼稚園雑草』を読んだ。そこに「教育は……、その出发点、あるいは土台とでもいふべきものは、子どものあからさまなありのままな自然の正直な心持からでなければ、何ひとつほんとうのことはできないというものである。」という一節があつたが、このグラウンドでの経験と結びつけて考えると、子どもを自然の中で遊ばせ、子どもの心を開かせることは、教育の出发点のひとつとしてたいせつに考えなければいけないことなのだと思つた。そういうことから考えると、幼稚園教育に於ける「自然観察」についても、子どもが自然にふれ心を開くことが基本なのではないか。そこから更に自然に親しみ知的な興味や関心が生まれ発達して



行くことになるであろうが、教育の出発点のひとつという意味でこの基本はたいせつにしなければいけないと思った。

子どもたちにとっては、自然に触れて心を開くことが「自然観察」の第一歩であるが、そういう子どもをみるのが、先生にとっては教育の第一歩といえるのではないか。自然を介して子どもと先生が心を通い合いながら活動していくのが「自然観察」という活動なのだろうかなどと思ったりしたのであった。

初めてのグラウンドでの経験は、新米教師である私の目を開かせる貴重な経験であったし、心に残る思い出であった。

六年間の幼稚園教師生活の中で、新入園児が自然物とのふれ合いによって心を開き、成長していった例はいくつかあったと思うが、私が三番目に担任した四歳児クラスの入園時期に、こんなことがあった。

入園して一週間たった頃、まだ私にくっついて離れな

いY子らといっしょに、園庭にあるお山へ行く道で、私がモンシロチョウをつかまえた。「ほら！」と見せるとY子は「あ、チョウチョ」と言っ手を出し、すぐつかまえて嬉しそうな顔をした。この「あ、チョウチョ」の言葉は、Y子が幼稚園で出した初めての言葉だった。お山へ行くとY子は、「きれいなお花のある所がいいわ」と言い、ペンペングサの所へ行って蝶を近づけ「ホラ！ホラ！」と語りかけて喜んだ。蝶がとんで行くのを見届けてから、Y子は私からすっと離れて砂場へ行き、ひとりで砂遊びをやり出し夢中で遊んでいた。

その翌日のこと、T男がモンシロチョウをつかまえてびんに入れて持って来た。二、三人の子どもとそれを見ているところへ、N男が登園して来て部屋の入口に立つて中のようにうかがった。N男はその頃、まだ部屋にはいりづらい子どもであったので、私は蝶で誘い入れようと思い、「Nちゃん、チョウチョよ」と声をかけた。するとN男は「ウワン」と泣き出し廊下を走ってまだ玄関にいた母親にしがみついて離れなくなってしまう

た。母親が言うには、「N男はチョウチョが大嫌いなんです」だった。

あの頃のお茶の水幼稚園は、構内に本校グラウンドという自然豊かな原っぱがあったので、おおいにその自然を利用して度々遊びに行き、草つみや虫とりなど安心して気楽に遊べたのは大変幸せだったと思う。(近年は、大学施設が拡充整備されてグラウンドはかつての草ぼうぼうの姿をとどめず、トラック、スタンド、球技コートなどになってしまったのは残念である)

又、幼稚園の庭は、自然豊かで、お山と称する高い所には大銀杏が枝を張り、その下には自由に草つみのできる野草の原っぱ、そしてうっそうと木の茂っている山道を思わせる小暗い細道、山の下には人工池と流れがあり、園庭の中だけでも自然と遊ぶ豊かな経験ができる環境だった。砂場は各保育室の前にあり、子どもたちは、いつでも好きな時に砂遊びをすることができた。(幼稚園内の自然環境は現在も、私が勤務していた四十年前と

殆んど変わらないのは嬉しいことである)

砂場遊びで思い出すのはK男のことである。K男は三年保育に入園した子どもで、私はその二年目から担任したが、三歳児時代に受け持った先生からきいた話では、K男は砂場が大好きで、毎日朝からお帰りまで砂遊びをしていて、砂場ですやすやお昼寝をってしまったことがあったそうである。それほどの砂場好きのK男は、年中組になってからも、砂遊びを続けたので、私はK男が絵をかいているのを見たことがなかった。K男はどんな絵をかくのかしらと思ひ、ふだんは一斉に絵をかかせることはしなかったのだが、K男に絵をかいてもらうために、或る時クラスの子ども全員を集めて、「きょうはみんないっしょに絵をかきましょうね」と、かいてもらったことがある。K男の絵は、実にのどかな表情の子どもの顔だった。思わずにこにこしてしまいたくなるようないい顔が描かれてあった。

後日、母親からきいた話では、K男は家では二歳年上

の姉といっしょに家の中で絵をかいていることが多いと
のことで、母親はK男が幼稚園でちっとも絵をかかない
ということに驚いていた。繁華街に近い地域の自宅では
戸外遊びはあまりしないとのことだった。



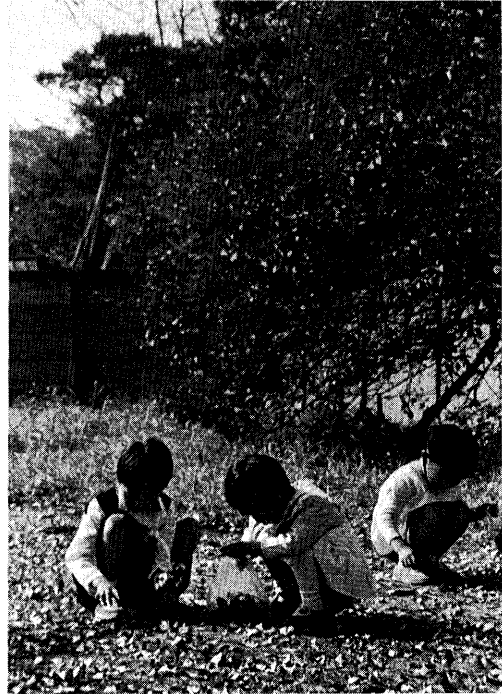
K男は家で十分に絵をかいているので、幼稚園に来てまで絵をかかなくてもよかったのである。幼稚園に来たら家でできない砂遊びがやりたかったのであろう。K男にとって、それが必要だったのであろう。子どもを知るのには、幼稚園内の活動の姿だけでその子を知ろうとしてはいけない、家庭での生活、地域での生活すべてをひっくり返してその子どもを知るようにしなければいけないということ、K男のことから知らされたのだった。勿論、K男のはその後砂遊びを卒業して他の戸外遊びを活発にするようになり、立派に卒園して行った。

あの頃は、幼児の登園の道々にも自然が豊かだったのであろう。登園した子どもが、よく、花や虫を「せんせい、おみやげ!」と言って持ってきた。園庭にも虫がいて、子どもがつかまえてくる。そういう虫などを保育室で飼ってみることも多くあった。

小鳥、金魚などは常時飼っていたが、四歳児組の五月ごろ、ハツカネズミを飼ったことがあった。まっ白な小

さいねずみはかわいらしく、私がカステラの木箱を加工して作った飼育箱に入れて、子どもたちもかわいがっていたのだが、ある日、数人の子どもが目まんまるにして興奮して私のところへかけ寄って来て、「ね、ね、Tちゃんがハツカネズミ殺しちゃったの!」と言う。私は、え、どうして? と思いつつかけ寄ってみると、箱の中のわらの上にハツカネズミが動かなくなっている。背中には錐がささったまま。錐は工作に使うことがあるので教師用の引出しにはいっていたのをT男が出して来たものだという。T男は困った顔で、涙をためてしょんぼりしていた。

T男を責めるのは避けて、ハツカネズミを庭の隅にうめて墓を作り、子どもたちの気持ちをしずめさせたのだったが、非常に気になったのは、T男がなぜハツカネズミを殺したのかということだった。T男は目立って小動物に対する強い興味をもっている子どもで、しょっちゅう虫をつかまえてきて見せたり、T男がかく絵の中には必ず虫が描かれてあった。しかし、つかまえた虫を



▲原っぱにはいろいろなものがある

その日、迎えに来た母親に、その日の出来事を話したところ、母親は、一寸考えたあとで、「わかりました。T男が虫が好きで家でもいろいろとつかまえてくるものですから、父親が昆虫標本を作ろうと言って、この間からやりはじめたのです。虫の背中に針をさして止めるのを見ていたので、それと同じつもりでハツカネズミにやったのでしょうか。とにかく、もう家で標本を作るのはやめるこ

とにいたします」と言った。

それから何年も後になって、私はガリレオ・ガリレイの『神なき知育は知恵のある悪魔をつくる』という言葉を知った。その時私の頭にすっと浮かんだのは、T男のハツカネズミのことだった。

故意にいじめたりすることは見られず、むしろ自分のものとしてたいせつにする傾向だった。保育室の飼育小動物にも関心を示すことが多く、ハツカネズミもかわいがり、前日にはハツカネズミをお人形のふとんに寝かせてやったりしてかわいがっているようすがみえた子どもだった。

私が幼稚園に勤めていた時期は、丁度、戦後科学技術が発展しはじめて、日常生活の中にさまざまな電化製品が登場してきた時期だった。昭和三十一年には保育要領に代わる幼稚園教育要領が制定施行されることになった。

その頃のある研究会の席上で、出席者から「近頃は家庭生活の中で電気冷蔵庫、洗濯機、テレビなどを使うようになって変わったが、科学の進んだこの時代には、子どもの遊びの中にも、そのような玩具をとり入れる必要があるのではないか？」というような質問が出た。領域「自然」に関する助言者の堀七藏先生（長年お茶の水附属小学校々長で倉橋先生外遊の期間は附属幼稚園主事も勤められた理科教育の権威）は、その質問に対して、「幼児期は、人類の発達で言えば原始時代に当たるものだから、幼児には原始時代の人間がしていたことを体験させることが必要であり、たいせつです。人間が人類の歴史でたどった道を子ども時代にたどらせることが土台になって、将来の科学者が育つのです。幼児期には原始

人がしていたように、自然物をいじくり、自然物を工夫して何かに使うという体験を十分にさせたいものですね」と言われた。それをきいて私は、感動してしまったのを覚えている。

数年前、久しぶりにお茶の水幼稚園を訪ねた。昔とちっとも変わらない様子だった。M先生が、「昔とちっとも変わらないでしょう。変わらないでいいのだと思っているの」と言われた。私もそうだと思う。幼児は人間の根っこなのだから時代がどのように変わろうと変わらないもの、その教育は変えるものではないと思う。

（元・お茶の水女子大学附属幼稚園
元・昭和女子大学短期大学部）